



蘇實年浪卓

冬部
卷之二

中村俊定文庫
文庫 18
591
14





華實年浪草三餘抄卷之十一目錄

○十一月黃鐘大雪冬至一陽嘉節二丁○仲冬章正章

復月暢月雪見月羣月天正月神樂月曆奏二丁○

漆宮線ヲ獻履襪ヲ赤アカ豆粥マシ三丁○相アハ掌ハ祭ハ宗像祭ナカカタ山

科祭春日祭社本祭當麻祭イタ平川祭梅宮祭ヒラカ當宗祭トコノミ

中山祭松尾祭大原野祭四丁○團轉神祭吉田祭日吉祭

五節帳臺試殿上洲醉五丁○狩使童女御覽六丁○鎮

魂祭ミタマ新嘗會ニホ七丁○豐明節會トヨアカリ日吉臨時祭八丁○賀茂

臨時祭トキトキ九丁○東三條御神樂十丁○里神樂小忌衣ヒカゲ日蔭絲ヒカゲ

華實年浪草 卷之十一 目錄



日蔭蔓 十一丁 ○心葉 神樂歌 神遊歌 阿知女 庭燎 十二丁

採物歌 蟬神歌 大前張 小前張 神樂歌 吹草祭 十三丁

○御火燒 十四丁 ○子祭 子燈心 三嶋酒市 十五丁 ○髮置 袴

著 帔初 道祖神祭 十六丁 ○空也忌 曉鉢敲 十七丁 ○新玉津

嶋御火燒 報恩講 十八丁 ○大師講 十九丁 ○御祭 廿丁 ○掛鳥

後日能 宇賀祭 廿一丁 ○山神祭 歌舞妓足揃 顔見 廿二丁 ○

冬至梅 曆賣 雪車 標 雪沓 經貫 廿三丁 ○杜夫魚 鯽

寒苦鳥 廿四丁 ○新生善 新干蕪 虎耳草 廿五丁 ○太山檜

七六丁

華實 三餘抄卷之十一 三餘齋鹿文著

十一月 潛確類書曰仲冬者日月會於星紀而斗建子之辰晉樂志云子者孽也言陽氣至此更滋生○清輔與儀抄

曰十一月ヲ霜月ト云ハ霜シキリニ 律○月令曰仲 冬之月律中

黃鐘高誘注云鐘衆也陽氣聚于黃泉之下也○月令廣義曰白 虎通云始律黃鐘何黃中色也鐘動也言陽氣動黃泉之下款艱

萬物也淮南子云黃者土之德之色也鐘者氣之所鍾 也日冬至德氣為土土色黃故黃鐘為律呂之根本 大雪 節

○月令廣義曰孝經緯云小雪後十五日斗指壬 為大雪十一月節言積陰為雪至此栗烈而大矣 冬之至 中 ○同

書曰大雪後十五日斗指子為冬至十一月，中陰極而陽始至，日南至，漸長至也。○孝經說有三義：一者陰極之至，二者陽氣始至，三者日行南至，故謂之至。○月令章句曰：有三極，盡漏極短，去極極遠，暑數極長。○玉燭寶典曰：十一月建子，周正月，冬至日南極景極長，陰陽日月万物之始，律當黃鐘，其管最長，故有履長之賀。○紀事曰：此月朔日偶當冬至，則是謂朔旦冬至，禁裏宣陽殿有平座，帝會諸卿獻文章而被賀之，民間亦製餅而賀，一陽未復，此義非朔旦冬至，每歲十一月朔日有此儀而專勞奴僕之日也。○漢雜事曰：冬至陽生，君道長，故賀此日不動身，安靜而可養微陽。○易曰：雷在地中，復也。先王以至日，閉關商旅不行，后不省方。

一陽嘉節

曹植冬至表曰：千載昌期，一陽嘉節。四時交泰，萬彙昭蘇。亞歲迎祥，履長納慶。○國史曰：桓武御宇

延曆三年十一月戊戌朔行慶

賞免田租，是賀冬至之始也。

仲冬

月令曰：仲冬之月。

周正

月令廣義

曰通鑑云：武王既勝殷，乃改正朔，以建子月為正月，色尚青，服以冕。注：王者受命必改正朔，明受之于天，不受之于人。如夏以斗建

寅之月為正月，平旦為朔，殷以斗建巳之月為

復月

五月一陰生至

正，雞鳴為朔，周以斗建子之月為正，夜半為朔。

暢月

禮記注曰：暢，克也。言所以不來復，故以此月稱復月乎。可發泄者，以此月万物皆克

實於內，故也。朱氏謂陽久屈而後伸，故云暢月也。未知孰是。○淮南子曰：仲冬之月，命曰暢月。注：以民人無事閒暢，故曰暢月。

雪見月

此月雪降，故稱雪見月。○紀事曰：斯月多雪降，貴賤以粉餅并菓實等之物，互相贈，是謂雪消言食之。

以_テ忌寒氣謂也○藏くもつるを此也

辜月

淮南子曰 仲冬之月

命曰 天正月

十一月建子周之正月 是曆家曰天正月也

神樂月

藏あり 以きて

云陽夕わつとと神此考るもあふりて神事と考る月也といふ

曆曰奏

日本紀曰欽明天皇十四年夏六月別勅医博士易博 士曆博士等宜依番上下上件人正當相代年月宜

還使相代又卜書曆本種々藥物可付送○江次第曰曆奏一日 中務輔率陰陽寮五人立案辛櫃等二人昇案_御四人昇辛櫃_案 上有菅陰陽師等退輔留更北進奏陰陽寮乃申世留其年乃御 曆進止申給者久止申無勅答輔退出園司二人昇案登自南階

立御座西第三間南簀子敷掌侍就案取函歸到於御帳東邊候 至上令取曆置西置物机内侍持空筥出置案上次園司昇案退 次水納言率内堅六人入自日華門令昇案辛櫃等退御曆還御 之後置於置物御厨子○延喜式_{陰陽}曰凡進曆者具注御曆二 卷_{六月以前为上卷 七月以後為下卷}納漆函安漆案頒曆一百六十六卷納漆櫃看臺 十一月一日至延政門外_{中宮東官御 曆供進准此}○事物紀原曰曆大昊始作 曆日是有書礼記十二月天子頒朔于諸侯○公事根源曰中務 省より年の曆をもちむすハ至上南殿におつりて是と御歴を おつりては内侍所におく十一月ハ一陽始く生る月也ハ二年 乃曆初と考へる今日天子は御歴を御つりては御歴の始りといふ 欽明天皇十四年百濟の博士よりくるる○雍州府志曰曆 毎年受南都幸徳并加茂氏所考之新曆鑄梓行于世今專称大

經師 漆宮線 荆楚歲時記曰晉魏同宮中以紅線量日數冬
至後漆長一線又明皇雜錄云唐宮中以女功

撥日之長短冬至後 獻履襪 魏崔浩女儀曰近古婦人常
比常日增一線之 以冬至日上履襪於舅姑踐

長至之義也 曹植獻襪表曰伏見舊儀國家冬至獻履貢襪所
以迎福踐長先王或為之頌臣既玩其嘉藻願述朝慶千載昌期

一陽嘉節四方交泰萬彙昭蒸亞歲迎祥履長納慶 崔駰襪銘
曰陽升於下日永於天長履景福至于億年 說文曰襪足衣也

○叙名曰襪末也在脚末 赤豆粥 凡土記曰天日正南黃鐘
○倭名抄曰襪和名之 踐長饋粥追萌微納休昌

注云是日始芽動為饋粥以養幼俗尚以赤豆為糜所以象色也
或云冬至日作赤豆粥禳厲鬼共工氏不才子畏赤豆 ○李吟曰

本邦の冬至はわがくに於ては正月の初日赤豆飯
を用ひてはるるのりいふと増山井紀也 相掌祭 先代旧
事紀曰

十一月上卯日行相掌祭先今日天皇幸正掃殿徵三公九卿宣
下相掌詔祭三輪任吉熊野熱田廣田射駒降劔大和津嶋之大

社命其國之因司各以其國宮倉初米供之其社司官神巫等賜
官幣行禘禮也 ○神祇令曰仲冬上卯相掌祭義解謂大倭 大和國
大和坐太嘉 任吉 櫻津國 大神 大和國大穴師 大和國城上郡穴 恩智 河内國高

大御食津 意富 多也大和國中郡多坐 葛木鴨 大和國葛木上郡波八 日前 紀伊國
命一座 弥志理都古神社三座 重事代主命神社二座 各州郡
石凝姬 神社等類是也神主各受官幣帛而祭 ○公事根源曰禘之

との友幣とくけりてをわがくに於ては正月の初日
相掌祭乃禘七十一社と云ふ事あり相掌 宗像祭 延喜式神名帳
と書てありいひての事ありと云ふ

日筑前國宗像

郡宗像神社三座○神社啓蒙曰胸肩神社所祭之神一座田心
 姬命素盞鳥○一說在宗像郡田島村蓋筑前大和山城以上三
 所有宗像社也三神共素盞鳥尊女也○公事根源曰はくし胸
 形の初乃多也武甕槌と素盞鳥と天照大神と素盞鳥と
 嶋姫命との三神は日本紀の神代上卷よりありと云々氏人宗像君也天
 武天皇ヨリ宗像朝臣ト云大己
 貴命未乘也十一月上卯日祭之

山科祭 上巳日 春日祭

十四日 杜本祭 同日 當麻祭 同日 平川祭 上酉日 梅宮

祭 上卯日 當宗祭 同日 中山祭 同日 松尾祭 同日 大

原野祭 中子日 園韓神祭 中七日 吉田祭 中申日 日吉

祭 同日 此神社ノ祭皆前ニ出夕リ年ニ兩度
 アリ故ニ季吟云句赫ニテ季ヲ定ベシ 五節帳

臺試 江次第曰本朝月令云五節舞者淨御原天皇之所製之
 相傳云天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之

下雲氣忽起疑如高唐神女髻髻應曲舞獨入膽他人無見人舉
 袖五變故謂之五節○其歌云予度綿度茂邑度綿九備須茂可
 良多萬乎多茂度迹麻岐底予度綿九備須茂○五節 帳臺
 試 宣日 前試 同 ○江次第曰五節帳臺試 中七日 常寧殿西臺
 帳臺上敷長筵其上可敷舞姬座其前各立白木燈臺一本東
 帳臺坤角引幔為小哥座北廂塗篋內為大師宿所大哥候同殿

東假座殿内角各ト五節所時冠五節皆參之後主上出御行事
藏人立舞殿東戸下用園舞回禁闕入先童女一人持火取次一
人持茵次舞姫下仕等取儿帳三本相從理髮相貝居茵上次大哥移作於后町廊邊次
大哥小哥登声如恒次舞姫舞畢退出○公事根源曰中世乃日
より言帳巻試より常寧殿より主上御後わりの蔭床振ハ人
かりゆりの儀式わりのちりゆりも、曉花より多ゆりそのゆり
情書ハ御前より致上人より賜福よりひりふり上御車衣ハ御蔭
御前よりゆりの上のゆりより多ゆり情書ハ御前よりゆりゆり
ゆりゆり情書試よりゆりゆり情書ハ御前よりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
殿上洲醉公事根源曰中宣日朗詠いさるるふりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

てみ所不ひひふ吾後不た事そ雅系かあり部曲の多ゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
正月三日し亥今夜及深夏雨貫首以下者殿上有洲醉事朗詠
今様之後已及散樂三献一鶴丸衛門尉永貫譽應無極種々遊
同及夜半感歎之至誠勝前々共○朗詠文選孫興公遊天台山
賦疑思幽巖朗詠長川善日朗猶清徹也翰日朗高也○部曲謳
歌也楚辭宋玉對楚王問云客有歌
於郢中者云其曲弥高其和弥寡
狩使公事根源曰昔ハ
狩使かゆりゆりゆり
かすの儀ゆりゆり○薄邊草日狩の儀ゆりゆり又鹿狩の更ゆり
アキるゆりゆりの儀ゆりゆり○杖今日原をゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
主重女御覽公事
根源

頭書曰卯日童女御覽事雲圖抄詳也其竹臺因下下仕參上之道也從表香殿西橋降立庭中南行但列竹臺下下仕從竹臺之西頭令步藏人自東頭行合故實也近代不知案內裏書曰童女參御前雲客副之或召藏雲客持參次下仕藏人副之各一所參畢又召他所也○江次第曰殿上人付童女傳等又云下仕等取几帳三本相從理髮相具又云藏人頭進向長橋東禁倍從等闕入免入之者理髮一人童女二人等也陪從一人近代持几帳下仕二人也又云養平五年無殿上五節寬平昌泰同例云○源平滅表記五節兩曰信足原天皇御宇唐土人昆崙山の如くあつた風俗く其玉圍く照さる一玉の光をくみ十兩の車にあつたを豊明と名せり天皇御宇門の如くく沖ゆき申す等と源一多い一神女をり降る信足原の座を廻雪の神と

むらぬくも天くらうて不きりんくぬ
 むらぬれぬ女の形とゆゆくもむらぬ
 鎮魂祭 旧事本紀

日盤余亥尊元年十一月庚寅宇戶志麻治命初存瑞宝奉為帝后鎮祭御魂祈請寿祚其鎮魂之祭自是而始矣○職負令義解日人陽氣曰魂言招離遊之運魂祭鎮身體之中府故曰鎮魂○延喜式細時曰鎮魂祭神八座八神殿大直神一坐右其日御巫於宮內院春稻飯以鹿苜炊以韓竈訖即威菌筭納櫃居案神部二人執向祭所供之○中寅日哺時五位已上及諸司官人參集宮內省式部依例檢列大臣若參議已上就西舍座神祇官人已下神部已上着青摺衣率御巫等入就廳上坐內侍持御服自內退出大膳式造酒司供八代物同時參縫殿寮令猿女參入即大臣昇就坐喚召使宣喚式部召使祇唯退出喚之即判官已上一

人進就版位大臣宣諸司令參入即稱唯退出令參入坐定大臣
命召使令喚治部令哥女參入又喚大藏省令賜鬘木綿並如上
儀訖神祇伯召御琴彈某甲二人共次召笛吹某甲二人共先吹
笛一曲即調御琴哥者始奏神部於堂上催拍手御巫及猿女等
依例舞訖即神祇官五位六位各一人中臣及侍從五位以上二
人宮内丞一人内舍人二人大舍人二人以次進舞於庭○公事
根源曰世宗如法よに奉りしれ殊勝の神行と申すことに
白河流御脱履の後に流中に移りしり天安二年とあり
らりしと申すことに自親元年十月御祇官とありし今
のよにあり○神社啓蒙曰鎮魂八神在平安帝都宮内省
秀吉公之時
新嘗會
神代卷曰天照太神當新嘗會○日本
紀曰用明天皇三年夏四月己卯
奉遷吉田山ニヒナタノ

丙子御新嘗於磐余河上○江次第曰今云謂嘗新穀又祭神儀
也朝則諸神之相嘗夕則供新穀於至尊也○公事根源曰十一
月中卯日新嘗會ハ神今食イはかりしりてのす十二也其れハ
るる次是ハ今イのころ稱と申すことに其れハ代の始り
大嘗會イのい年毎のころ新嘗會イ也ト食イの人の初日
陰イと云々用明天皇二年四月イ新嘗イはりしりしり
神代イりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
其式ハ次才イしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
豊明節會
江次第曰新嘗會裏
書云毎年十一月申
辰日行之豊明節會是也天子嘗新穀故曰新嘗會曰大嘗會時
右辰日己午日三ケ日イ式略之○公事根源曰是ハ今年の極
神イしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
新嘗の多イしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
上御宰相辨小島とありしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

新嘗會 卷之十一

忌と束帯けし一はきりふらふをうきりくまげて日の上御宰相
辨の上首と勅じ南殿の廂より子とゆふち内辨と下座はくわ
き酒を記酒乃をきとより大それた南大衆もふりて巻帳乃を
五方袖をわけてうま入車とゆふち上座の言ふとふりて煙る衆
かきくふま今の儀ありぬき今のは病をけれ年なりゆい
らくふ教と人より候ふと何りひいひ高きの程をゆかぬ
わらわん候ふんとてゆかぬの事らうりてこれるわらうん
うみゆかぬゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
てこのうま ヒヨシリンジ
日吉臨時祭 同書曰建曆三年十一月十八日
わらうと うめて致上の使とまふとある八月
小延曆寺の衆徒長樂寺に官をいふゆきゆきゆきゆきゆきの
幸にゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきの
○東鑑曰建曆三年七月九

五日清水寺法師建立一堂其地在清用寺領之由彼寺憤鬱相
論之旨清用寺為台嶺之末寺山又谷之清水寺依為南都末寺
奈良殊怒之而八月三日清水寺構城山僧集會于長樂寺自公
家先遣檢非違使有範惟信基清等破却清水之城制止武備急
著法衣可在佛前之旨被仰合寺僧養伏之相次遣廳官長吏於
長樂寺被禁制之處所司法師等僅相逢更無養伏之詞惡僧等
吐奇怪之詞殆及放言廳官馳歸奏聞之間忽被仰北面之輩並
右京健士近臣家人等圍被寺西至不殘一人可生虜之由宣下
此時生虜二十人 江次第曰賀茂臨時祭試
被誅者十餘人 樂下清涼殿東廂御簾孫
賀茂臨時祭
庇南第三間立殿上御椅子給御琴於樂所公卿等參入候殿上
舞人陪從參著樂所暫主上出御次召公卿著座殿上人著座陪

從等參進出立滝口廊南砌先吹調子之後而三度次出一哥漸
 步進留二哥之間又進漸行當拊桐下立定舞人進出出駿哥間出
 及到吳竹臺下之間或被仰一舞二人進出次舞人依位階相分卷纏吳竹神
 進昇駿河舞畢退於竹臺下右祖又進舞求子畢退公卿退主上
 入御若及昏黑者主殿官人奉炬火於庭中上卿參弓場邊被奉
 宣命次出御次召人次使以下看座畢次一獻次二獻次三獻陪
 聲哥次盃巡不定次給挿乃華五位截人一人跪長橋下取挿乃
 華次弟獻之上達部取華渡坐挿使冠九舞人同之右次使以下
 退出○公事根源曰此多のわらハ守多御門のまゝ王侍従と
 ありしは後より後より賀茂大明神ぐんし給ひて修海の家と
 ありしは後より後より賀茂大明神ぐんし給ひて修海の家と
 ありしは後より後より賀茂大明神ぐんし給ひて修海の家と
 ありしは後より後より賀茂大明神ぐんし給ひて修海の家と

東三條御神樂

共範記曰仁平二年十一月十七日丁未
 被行東三條御神樂用迴廊戸并神殿御

戸供御供角振神阜神坐東三條弟○拾芥抄曰東三條弟四條院誕生
 所或重明親王家云二條南西北二町忠仁公家貞仁公大入道
 殿傳領長久四四元燒失○神樂起古語拾遺曰忌部廣成撰其後素盞
 烏神奉為日神行甚無狀于時天照太神赫怒入于天石窟イハヤミ
 繫戸而幽居焉尔乃六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔措イハヤミ
 厥疾事燎燭而辨高皇產靈神會八十万神於天八湍河原議奉
 謝之方云又令天鈿女命以真辟葛為鬢次羅葛為手繩イハヤミ以行葉
 飲懋木葉為平州手持着鐸之矛而於石窟戸前覆誓槽古語字氣布
 意奉庭燎巧作俳優相与哥舞于時天照太神中心独謂此比
 吾幽居天下悉罔群神何由如此哥樂聊用戸而窺之多令天手

力雄神引啓其扉遷座新殿則天兒屋根命太玉命以日御總廻
懸其殿令大宮賣神侍於御前豐盤同戶命擲盤同戶命二神守
衛殿門當此時上天初晴衆俱相見面皆明白伸手哥舞稱曰阿
波言天阿那於茂志呂古語事之甚功皆稱阿那多能志言伸手而舞
之多能志阿那仇夜憇竹葉飲憇木名也振其余乃二神俱請曰勿復
此意也還幸○御鎮座記神樂起畧曰天鈿女命採天香山竹其節間彫
周孔通和氣今世亦天香号興並叩絃今世和琴木木合而備安
樂之聲移和氣顯八音即猿女神伸手梳声或哥或舞顯清淨之
妙音供神樂曲調當此時歎解神怒妖氣既明天無復凡塵以來
凡雨時若日月全度一陰一陽万物之始也一音一声可樂之基
也神道之真願天地之靈粹絲竹之要八音之曲已以為貴故依
旧氏椎猿女氏率來目今孫屯倉男女轉神代之遺迹今供三節

祭永為後例○堀柳を大のよ小のゆ
里神樂サトカクラ連歌秘書曰里

神樂ハ内裡ノ外ヲ悉ク里神樂ト云里トハ私ノ心也非居所
神樂ハ内裏ガ本也内侍所ヲ山神樂ト云ト也○玉山とや
いつくしあゝの里神樂あゝ
あゝ小忌夜コトメ或記曰小忌文竹桐蓑
ハ堂ズ冬ハ堂之舞人
ヲ奉ル時并領ス見エタリ年少ノ人ハ或ハ私ニ是ヲ調へ
着用スト云小忌青摺ノ衣トモ云大掌会豊明節会等ニ用ノ
又齋服氏云右節会ニ小忌ノ袍ヲ着用ス其時腕腋ノ如シ但
身一幅也狩衣ノ寸法ヲ用又白キ布ヲ粉張ニシテ藍ヲスリ
後ニ室ノ裏ナシタハ一重也文小草柳水早蕨蝶小鳥等也山
藍ノ葉ニテスル又諸司小忌ト云アリ建曆ノ度麻布席悉ノ

舞臺神樂
卷之十一
十一

モノ也小忌袖山藍ノ袖ナト云○拾遺此上の
小忌乃高きお牙て早うさかりのろろ 慈鎮

日陰糸

日陰蔓

日本紀神代 日以蘿為手纏○古語拾遺曰以真辟
蔓為髮次蘿蔓為手纏○倭名抄曰蘿蔓 和語云比如
今加都良

古今采雅抄曰サガリ苔ハ岩ニサカリタル苔也日陰ノカツ
ラ氏云神祭ルトキ昔ハ此苔ヲ取テ舞人神子ナトノ鬘ニシ
テ又袖ニカザリケルトナン今モ日陰ノ糸トテ草ニカタト
リテ糸ニテ結フ也或説ニサカリ苔ハサルヲガセト云物也
又説山ノ峯ナトニモ生ヒ木ニモカ、リタル苔ノ長クシタ
リタル也薜荔トモ書也○或説曰細キ丸組ナリ或ハ分組モ
アリ青キ糸或ハ白キ糸ヲ用フ長一丈二尺許所詮糸ヲアゲ
マキニシテ九右八筋或ハ十二筋冠ノ九右ニ角ニマトヒ結

ル事ナリ蘿ト云草ヲ神代ニ鬘ニシタルコト日本紀ニ見エ

夕リ或秘抄云日陰蔓冠ノ巾子ニ結フユヒメ纓ノ上アアリ

尤壯ノ色 心葉 梅花三寸許又金ノ枝ニ梅花貝ヲ付ル若

アルニヤ 八蕚芳貝或ハ結花紅梅白梅蔓二月テ巾

子ニ漆テ是ヲ立ル九右各 神樂歌 神遊歌 古今集

一枝或ハ四枝氏見エタリ 日大哥

所御哥○のい 新しん年の路はかくしとせまきとがきよこの

きとけ光○或説云大嘗会ノ時近江ノサカ田部ヨリ翁ノ参リ

テ稻ヲ舂其時此哥ヲ謠也アタラシキ年ノ始トハ帝王御即

位ノ初ナリカクシコロハ大嘗会ノ凡ヲ云言也夕ノシキヲ

ツノトハ樂ヲ重疊スル心ナリ又薪ヲツムヲタノシキヲツ

ノト云也云神樂ハ冬ノ物ナルニ新シキ年ノ初心得夕ガフ

人モヤト記ニ侍ル ○ 第の志もふつふ山々後言のよけ
 かゝるやあふらふ ○ シモト云葛城山正月卯ノ日ノ卯杖ヲ奉ル
 ヲシモト、云杖ハ葛ニテ結フ故ニシモト結
 葛城山トツ、ク是ハ卯杖ト名ルユヘトナリ
 阿知女 秘抄
 曰阿知女作法 本阿知女於於於於未於今阿知女於於於於 ○
 一条禪岡御説アチノ作法造成所見ナシ但ウスノヲアチノ
 ト云ルニヤノトウト五音相通セリ天鈿女神ノ岩戸ノ前ニ
 タ、ンテ能優ノタハフレヲナシ侍ルヲ今ノ世ニアチノノ
 作法ト名ツケ侍ルヘシ於於於於ワラハス声也日本紀ニハ
 ア、 笑声ヲ云リア、ヲ、又同五音通也於今ハ天鈿女ノ
 手艸ニシテフルニヒ侍ル木ノ
 庭燎 神代卷曰火処焼
 名也但又哥ノ節ハ下ニ見ト云
 ○古語拾遺曰天鈿

女命於石窟戸前覆誓槽奉庭燎巧作俳優 ○ 愚按抄曰庭燎ノ
 事ハ礼記ニ載タリ又毛詩ノ篇ノ名ニモアリ ○ 毛詩曰庭燎
 大燭也諸侯將朝則司烜以物百枝并而束之設於門内也 ○ 公
 事根源曰大司烜樂此也、ハ天照大神の所より乃いといとて
 こゝろは法律のいなり、ハ天鈿女神令御紀のうつと
 かゝるは法律のいなり、ハ天鈿女神令御紀のうつと
 あり、ハ法律のいなり、ハ天鈿女神令御紀のうつと
 庭燎 採物歌
 乃けり、ハ法律のいなり、ハ天鈿女神令御紀のうつと
 葛 右何レモキニ取
 韓神話 梁塵愚按抄曰カラカミト
 モノ故採物哥ト云

採物歌 神幣杖 篠 弓
 劔抄 斤折 諸奉

ニ坐ヲ申侍レニヤ○本みちるいふかたさうけこころのたは
ときせんわかしと死○未ハむうふんたふりもちてんれくわこのうら

きせんや オホサイカリ 大前張 宮人 本綿志天 難波瀉 前張 小前張 コサイハリ

かたし カトシ 階香取 キカドリ 井奈野 イナノ 脇母古 ワキモコ 千歳早歌 チサイハヤカ 吉々利 キキリ

簾枕 シラシ 用野 ヨノ 磯等 イソナ 篠波 シノナ 殖槻 ツクキ 神樂哥 カガウタ 星得錢子 ホシトケ 本綿作 ホンワタ

總角 ソウカク 大宮 オホミヤ 湊田 ミナタ 養 ウツ 寔殿歌 ヘイトノカ 酒殿哥 サカトノカ 此等本未アリ深塵

畫日 ヒヨ 弓立 ユキタチ 朝倉 アサクラ 其駒 ミツマ 愚按抄詳ナリ○御傘曰くくもの本人か柳も喜喜にありい

拙拙わりのいふ人様ふ シラシ 吹草祭 フイゴミツリ 神社啓蒙曰同金工專以

也仍數為埴土往來且拜神無世不諳此理徒為金工字 シラシ 稻荷為主神何也曰古有

事曰相傳三糸小鍛治宗匠鑄刀劍所稻荷神出現而搗鉄槌以

助鍛鍊刀云尔宗匠鍊刀之石盤今在東山知恩院山門下銀匠

鍛工等凡設篝蓋者悉祭之或謂篝蓋祭知恩寺鎮守元賀茂明

神也三十九世滿民和尚加稻荷八幡故有稻荷明神之火燒○

老子經曰天地之間其猶橐籥乎虛而不屈動而愈出○唐韻曰

鞞薄拜反韋囊吹火也或作排亦通○和漢三才圖會曰鞞音擗同凡角

囊也按鞞鍛治家皆用之吹草也以狸皮為上○和訓義解曰ノ

イカウトハフキ 御火燒 オホヒヤキ 世該回答曰世うらふかふと

カハヲ訛也祭之日 了のゆゑ但此常々法律のあ

してをわかしと死○未ハむうふんたふりもちてんれくわこのうら

中ハ天然を林の意アとしてこもるひは法律い乃アヤルらふ

華宴年浪草 卷之十一 十三

天細女令備丸のうらみかきしむけをたまたましむいさいを
 ちりたりしうらみをわらわらとあひりしうらみこのまをこり
 ちりり今も内約あまのりしうらみ樂のまをわらわらとあひりし
 焼なりゆき傍のりしうらみ所治の人をわらわらとあひりしうらみ
 したるものうらみしむけのりしうらみ○紀事曰御火焼諸社修之各其縁日異
 也八日稻荷御火焼也先朔日稻荷神氏子兒童造小神輿自朔
 日振市中入人家請米錢以是充八日火焼之資料也八日新御
 供社家松本氏調進○朔日知恩寺鎮守賀茂明神○四日上出
 雲路幸神○八日安居院有栖川宮并大坂高津宮玉造稻荷天
 王寺庚申○九日貴船結神○十日太田社五條天神○十一日
 栗田口神明○十二日生玉○十三日三津八幡○十五日処々
 八幡并今宮○十六日処々神明吉田世崎天王并座摩○十八

日上下御灵○廿三日貴船○廿五日北野具外每神社此月縁
 日積柴於神前供神酒然後投火而燎之兒童各口唱某神御火
 燒而拍之氏子家亦以其生土神之縁日修火焼
 蓋助益一陽來復之神氣者乎○其外說畧之
 子祭子

燈心 旧事本紀曰奉避此国於大己貴神者兄弟二神各有欲
 所從者率往神社啓蒙云今世同到彫負袋之取而配蛭子宝 ○山門山信破
 大黒也和大国手大回音相同蓋大回者大己貴日
 日蓮義下曰今此天神事仁王經所說也旧譯云以祭塚神矣新
 譯經云以祭塚回摩訶迦羅大黒天神矣西方諸大寺処々咸於
 食厨柱側或在太庫門前乃至是大天之部屬性愛三寶護五眾
 使無損耗求者称情云十一月八子ノ月ナレハ子ノ日ヲ用ル
 丁其子細アリト云○紀事曰凡諸商賈此月日子時祭之蓋

賣買之間取其利也。故比鼠子之蕃息。凡所供子之膳食。每品加大豆。又供兩股大根。大豆鼠之所好。食也。兩股大根。信稱福素。○子燈心者。和莫三才。國會曰燈心草。用小刀。按指以裂皮。取白穰。凡利六斤。得白穰半斤者。為上。武州之產。肥大為最上。江州之產。次之。凡貯燈心。畧蒸熟。湯晒乾。則經久。不瘦。以每十一月子日貯之。未知其據。

三嶋酉市 三嶋社 在伊豆

國賀茂郡三嶋祭神一座。大山祇命。崇峻天皇庚戌年出現。揚津島下郡三嶋社。伊豫越智郡三嶋社。與當社三所同一神也。○社說曰。本社大山祇命。相殿四座。中山祇命。藤山祇命。正勝山祇命。籬山祇命。御鎮座。聖武天皇天平五癸酉年。○前々大平記曰。先仁帝室。龜十年秋。自伊豫國勸請。○神代卷曰。伊持諾尊。拔劍斬訶。遇突智。為三段。其一。段是為大山祇神。鈔曰。伊豆國賀茂郡

三嶋神社。例祭四月十一日酉日。奉遷神輿。二基於拜殿。即日遷入于本社。本地大通智勝佛祭祀之日。商賈未集。而交易諸物。謂之酉市。於當社請兩之和歌。○天の川苗代 カミラキ 髮置袴著 カミラキ

皮初 カキ 民間多用。此月十五日。貴家被撰吉辰乎。○紀事曰。此月被消吉日。禁裏院中三歲諸王子。御髮上御色直。五

歲。官方御深曾。裁著袴。九歲御方御。紐直等。所謂地下。髮置袴著。帶解是也。帶解者。倭俗幼兒。間不圍帶。衣領之中。間著紐於左右。互自兩袖之下。左右貫之。背後結之。高貴息男。共多九歲。臘月撰吉日。解捨衣紐。代圍帶。是謂紐直。地下息五歲。而捨紐。古者十三歲。姬官方有齒黑之儀。拱閑息亦然。凡高貴之息男。自一才至五才。有令戴餅之法。以餅三度當頂。云民間三才小兒。髮置令蒙綿

帽子是謂白髮并松枝并多知波那於其上又食膳置加那加志
羅魚并小石而祝其堅固也○袴和漢三才圖會曰袷又重忠徒
賴朝狩富士野時以為褶袖袴裾長而無益于武士健力故始解
去袖一幅人僉感歎之以來士庶人用之呼其短袴曰半袴長者名
呼無袖褶曰有衣○被初五歲或七歲之女子初令蒙帔衣帔衣
披衣不帶也官女至庶人婦女出外被單衣於頸其長等身而不
顯面貌也以練絹或布染色紋無
道祖神祭
一月十六日

在櫻州天王寺領天王寺村道祖神又稱幸神實猿田彦命○
祭ノ日一村ノ童部集リ往来ノ人ニ錢ヲ乞テ祭祀ノ資料ト
ス錢ヲ與ヘザレハ繩ヲ以テ往来渡リ留テ終ニ繩ヲ以テ卷
クヲストク依テ此事ヲ知ル人ハ商賈共ニ今日此處ヲ通路

セ又ト也唯櫻ノ奥荷飛脚ハ
故アリテ通路ノ煩ヒナキ也
空也忌
元亨親
書曰親

光勝不言姓氏為沙弥時自稱空也人亦不諱言空也少好佚遊
天下殆遍所過道塗多為利濟荷鋤鑿峻拾石鋪濕架破橋修廢
寺無水之地多穿井必其冷以共常唱弥陀号悟名弥陀井往々
而在焉荒原曠野每逢遺戲摺聚一處念弥陀名灌油而燒過弱
冠於尾州因分寺雜髮為沙弥天慶元年入王城於市鄽唱弥陀
勸化人々呼為市上人天祿三年九月十一日臨終時著淨衣執
香炉端坐語門人曰無量聚衆來迎滿空語已氣絕而手中香炉
不頹時香氣滿空音樂響天半七十臘二十五○空也堂号極樂
院在四條坊門南堀川東鉢叩等守此堂傳云旧在三條極樂
極樂道場昔空也上人光勝夜々執行唱念仏巡洛陽梅北山時

每夜鹿來鳴上人甚愛其聲為閑居友一夜不來心恠之翌日獵者來告云昨夜於此處殺鹿也上人大驚其皮角而皮為裘角排杖頭為遺愛之物悲獵者亦悔之愧之終剃髮為僧今鉢扣等具齋也○紀事曰空也曾晚年為修行出京師赴東國日謂徒弟云今吾已老無再歸難為必則今日今日以出寺之日為忌日故用今日修法事斯院中有十八家其中年老者剃髮著衣為僧代々以空字加諱字其餘不剃髮帶妻子常製茶羹而賣市中凡斯徒謂鉢敲言斯徒至冬則夜々巡市中又到洛外三昧場因倍火葬之場稱三昧南京五ヶ処行基菩薩之所定也北京五ヶ処者弘法大師所被定置舟岡山中山鳥部山最勝河原珍皇寺是也各鳥鉦誦念佛之号或以竹杖鳴所携之康瓶口唱無常之詞若有信施之米錢則以瓢受之以瓢代鉢鉢故稱鉢敲其所敲之竹

杖於今代用貴布稱壇上之竹上人暫寓北山貴布稱壇上之菴之遺意也○一休和尚鉢扣讀日晝不著笠夜不茵東西南北自由身一瓢扣畢有何益花幾十方淨土春

新玉津嶋御火燒

紀事曰十三日自昨日至今日冷泉家多

參詣或有法樂之和歌凡此門前一町悉此社之氏子也今日町人獻神前之御酒於冷泉家則賜酒食○此社在五條南鳥丸西玉津島町○崑玉集曰為家卿マコトト時々影玉津嶋マ石首の身をとりて毎月六日けり初歩を納わりしとくとの高ハ六条ノ向社又俊成卿乃幼傳の志也○竟憲深秘抄曰等持院殿御時御靈夢ありて乃常俊成マの屋池の中は多ク幼傳マから経賢法印マ刻あり補きん于今

報恩講

紀事曰自今月廿二日至廿八日一向宗修報恩講倍稱御霜月是致懇祈者也

宗祖親鸞上人忌也。傳曰親鸞姓藤原右內臣內麻呂。後亂皇太后宮。大進有範之子也。九歲投大僧正慈山室。而剃髮名範。享建仁元年二十九歲。詣源信上人禪房。歸淨土專念宗。改名緯。空。又号善信房。弘長二年仲冬廿八日。入寂。年九十歲。一宗總修法事。西東六條最嚴重也。晨朝日中初夜。勤行無量壽經九声。念佛伽陀。圓向等。被修之門徒。且那。每日改排。仙前之立花。五。爭奇。獲為仙前莊嚴。傍信銅瓶之大者。称花瓶。又謂薄端。其上折受。水至淺。故称之。以。數品之花木。挿其中。是称立花。○雍州府志曰。本願寺。龜山院。文永九年。親鸞上人之息女。覺信。凡於大善。建立之。上人遷化。後十一年也。尔後移宇治郡山科鄉。又遷。獲州大坂。天滿宮之側。然後移京師六條。至光佐上人時。其孀光壽有故隱居。本願寺。後東方。故称御裏。其弟光昭。雖為。子。為興正寺門主。

其外有。大師講。當月自廿一日至廿四日。諸山修大師講。比。厥流。敷東。敷日光之三山。自廿一日。晚至廿三日。

朝晝夜有法。問謂之論義。一山一院。先年々。勤。会场。号之天台。會。侶。間亦修。大師講。各食赤豆粥。折枯柴為箸。是謂智慧粥。○佛祖通載曰。天台智者禪師示寂於開皇十七年十一月廿四日。師諱智顛。字德安。姓陳氏。類川人。遷都寓居荊州華容縣。梁散騎。益陽公。起第。二子。母除氏。夢香煙五彩。蒙回。在懷。欲拂去之。聞人語曰。宥世因緣。寄託王道。福德自至。何以去之。誕育之夜。室內洞明。信病。其光乃止。憶先靈。瑞呼為王道。卧必合掌。坐必面西。年長時。口不妄。敢見像。便禮。逢僧必敬。七才喜往伽藍。諸僧訝其情志。口授普門品。初啓一編。即得。年十八。投相剎果願寺。法緒出家。授。以十戒。仍北度。詣惠曠律師。北面。橫經。具蒙指誨。又詣光州大蕪山南。

嶽禪師受業心觀乃於北山行法華三昧始住三夕誦至藥王品
心緣苦行至是心精進旬解悟使發見共思師妙靈鷲山七宝淨
土聽公說法思為印可於是師資改觀名聞遐迹思曰汝於陳國
有緣必利益思既入南嶽大師詣金陵綿歷八周語默每思林以
乃夢岩崖万重雲日半垂其側滄海無畔見一僧搖伸子臂挽師
上山以夢通告門人咸曰此天台山也因挾道南征隱滄斯岩用
皇十一年十一月廿三日於楊州設千僧會為王授戒未幾王入
朝師旋台嶽躬率禪門行光明懺仍立誓曰若於三宝有益當限
此余年若其徒生願徒連化不久告衆曰當卒此地矣誠曰宜名
默然吾將去矣言已端坐如定而來天台大石像前春秋六十七
○別行傳曰隋開皇十一年九月三日大王敬屈授菩薩戒師曰大
王行傳聖禁名曰惣持王曰大師傳佛法燈稱為智者○國清寺

碑曰王後檢地持經特立此号彼經戒品第十云若在家出家發
菩提願恭敬長跪曲身向於智者作此言願大德受我菩薩大律
儀戒如是念已默然而住尔時智者作此言善男子汝於我受一
切菩薩大戒云○和讚曰皈命頂礼大唐国天台大師八能化ノ
主佛ノ使卜世ニ出テ一乘妙法宣給ノ眉ハ八字ニ相分レ目
ニ八重腫相浮ヒ妙惠深禪身ヲ饒リ佛ニ殆ト近カリキ下○
傳教大師傳序曰睿峯鼻傳教大師在靈山則称藥王菩薩出震
且則號智者大師為陳隋二帝之模範立台嶽八柱之華宗代佛
宣和指心 御祭 神社啓蒙曰春日若宮在去木宮可一町
見性云 平森中也所祭神三座内ニ坐補佐神也
○二十二社註記曰若宮垂跡四所相同平否兼滿云四所共以
同日歎嚮也若宮遷坐神代也○若宮祭礼十一月廿七日也是

謂御祭先^北六日有^{宵宮}之儀○法要集曰若宮御殿天押雲命
云然若宮神主為一家秘說○八十六代四條院祈年祭宣命曰
去三日神木啟坐自今般天志向後仁至未專以公卿可為勅使
魚又若宮祭礼者當社之壯觀也殊凝嚴襟天可奉官幣○紀事
曰南都若宮祭夜宮其日粵福寺僧頭屋有田樂凡頭僧一人則
謂兩頭是兼而人之義也此時前所勤頭之僧一人加之助其旁
有二人則謂片頭兩片相合之義長吉川黨參詣春日社携野太
刀牽馬是謂遍照院之儀於御旅所前有流鑄馬或因祈願使人
乘馬而馳驅是競馬之義也入夜亥刻許神幸於若宮拜殿有神
樂其後滅灯燭社家各擁護神体其外各供奉点香於手炉而携
之暗中警蹕奉^遷旅所於茲張灯燎火音樂相撲等次第修之諸
人參詣恰如白昼當日其七日古無式日寬正年中定之巫女及伶

人田樂猿樂供奉僧於松下鳥居南方視之奉行職人亦在茲樂
人上越後守騎馬供奉是為関白代於茲有陪從樂田樂施藝術
猿樂唱用盃是謂松下用盃凡猿樂始賜大夫新作吉事之詞祝
万歲是謂用盃之詞而後舞曲始其後金春金剛兩座大夫供奉
時般立合觀世保生兩座大夫供奉之時弓矢立合舞之次大小
鼓拍之殿後領大和國內之武家各出鞍馬并長柄鎗勤供奉之
行列不知其數入夜自旅所還幸粗同神幸之儀○日使トハ
関白殿下ヨリ奉ラハ騎馬ノ伶人は也黒キ袍冠ノ巾子ニ藤
ノ造花ヲ掛ル此祭ハ人皇七十五代崇徳院ノ御宇天下大ニ
飢渴三年又大ニ疫病アリテ人民悩ミ死スル者道路ニ充ツ
関白法性寺忠道公此御祭礼ノ大願ヲ奥シ玉ト始テ天下靜
謐ニヨツテ始ラハト也○注進狀曰保延二年丙辰九月十

七日始行之云凡カケトリ掛鳥カケトリ春日祭時カケトリ鳥獸謂之掛鳥カケトリ雉千二
崇徳院御宇當ルカケトリ百五十六羽兔百三十四耳狸百四

十二匹此亦保延二年始之カケトリ先規ヨリ地侍トテ六流アリ長

川長吾川平田葛上カケトリ乾勝散在是ナリ奈良大宿所ニ集リテ掛

鳥ノ事ヲカケトリ春日祭廿七日翌廿八日修能藝故謂之

司トル也カケトリ後日能カケトリ後日能先期日於旅所前流鑄馬伶人舞

相撲細男舞田樂曲等有カケトリ按宇賀祭諸書雖言十

之翌日廿八日有猿樂カケトリ一月晦日不記其處千

梅カケトリ復纒輪宇賀祭在九條東洞院則稱宇賀過カケトリ○雍州府志九

條鳥丸宇賀過子カケトリ而外共無宇賀祭之儀偶見真言家書攝州

住吉之土俗十一月晦日乘家事專祭倉カケトリ之遺凡住吉

三神之御徳合一カケトリ神秘有云此神王利益廣大詳于佛說最勝護

因宇賀耶頗得如カケトリ山神祭カケトリ神代卷曰伊特諾尊斬軻遇突

意宝珠陀羅尼經カケトリ智命為五段此各化生五山祇

一則首化成大山祇カケトリ二則身中化成中山祇カケトリ三則手化成麓山祇

四則腰化為正勝山祇カケトリ五則足化為離山祇カケトリ是山神也山林ヲ

持傳カケトリル畿内ノ村民此月祭山神ト云ルハ即火燒ナリ山神

ノ社ノ辺樹上ニカケトリ幣ヲ切カケ神供ヲ備へ燒火ヲ燒ヲ云ナリ

歌舞妓足揃カケトリ顔見カケトリ紀事曰此月初四条河原狂言并傀儡

是祢顔見或謂足揃是使見人知カケトリ侵者顔面又揃調拍子連速之

義也到臘月二十日許止之カケトリ正月二日又始之大坂道頓堀江戸

堺町等亦同カケトリ○故事苑曰杜氏通典唐ノ散樂ヲ列又ル中ニ歌

舞戲ノ名出夕リ故此字ヲ可用而カケトリニ倭俗ハ歌舞妓ノ字ヲ用

按妓ハ女樂也ト注ス余嘗浪華ノ老者之談ヲ聳ニ浪華昔ハ
女子出テ歌舞ノ集人屈指五六十年ニ不過依之妓ノ字ヲ可
用云○雍州府志曰哥舞妓尤出雲大社巫女有号久亦者一轉
神樂歌舞古称白拍子之類相比美云昔ノ歌舞妓ハ僧衣ヲ著
シ鉦ヲタキ佛号ヲ唱ヘテ念仏踊トイヒシニ其後名古屋
山三郎ト云シ者出雲巫国ト云女ニ密通シ国ニカヲサセ
頭ヲ包テ早歌ヲシヘ舞一ケレハ歌舞妓ト云往昔ノ白拍
子ト云ハ近頃ノ哥舞妓ノ類ナルヘシ白拍子ハ盛衰記平家
物語等後鳥羽院ノ御時嶋ノ千歳若ノ前トテ二人ノ遊女舞
始メケルトナシ徒然草ニハ磯ノ禪師又其女静ヨリ始ルト
イヘリ其頃ハ猶古ニ近カリシカハ妓女ノ輩モ郢曲ヲウタ
ヒ箏琵琶ヲ強セシ由古記ニ見エタリ又大和物語ニハ亭子

院ノ帝鳥飼院ニオハ
シマス頃ト見エタリ
冬至梅
梅譜曰一種冬至前已開故
云早梅○方巨山冬至詩曰

翌日觀書不幾行梅梢橫月歛黄昏○和漢三才因會
曰草葉冬至梅中花紅冬月開有八重中花淺紅者
曆賣

紀事曰此月南都幸德并賀茂氏獻來年之
新曆并各々之年筮等於貴家
雪車
史記原本
曰泥行乘

被注徐廣曰他書或作菴駟案孟康云棧形如其擣行泥上如淳
云棧音茅菴之菴謂以板置其泥上以通行路也○正義曰按棧

形如船而短小兩頭微起人曲一脚泥上擣進用拾泥上之物○
和漢三才因會曰輶音棧記義漢書絕尸倍云曾里書經注禹治水

時乘四載蓋水乘舟陸乘車泥乘輶山乘櫟也輶以板為之其形
如其擣行泥上者也三才因會云嘗聞向時河水退灘淤地農人

款就泥裂漫撒麥種奈泥深恐沒故制木板為履前頭及兩邊
起如其中綴毛繩前後繫足底板既潤則舉步不陷今海陵人泥
行及川過葦泊中皆用之其字從木從毛取其義也本邦所用
之雪車似舟者乎北國之山人用雪中○礪初の雪に
わち山嶽の後人 和漢三才圖會曰標橋史掎書橋文借
標カキ云如牟之木虞書云嵩王山行所乘者
以鐵為之其形似錐長半寸施之履下以為上山不蹉跌也按如
越州北地雪深而不乘輜不能行不着標不得上山也南方人未
嘗見者也○夫かきくづ紙の雪乃履きくづかきくづか
仲正 ○集有乳山はくづくづる後もくづかきくづる
あきくづ 雪ユキ沓ツナ絕貫ツナ
西行 說文曰履足所依也草曰屨麻曰屨
皮曰履此物賤易有宜各自蓄不假

借人故名之不借也履字本作屨从舟舟能載物屨能載人○世
本曰黃帝臣於則始作屨民間雪中著履有草皮之二種而
忽謂之雪沓又謂之絕貫其制少異也今農人春夏則屨秋冬則
履從省便也廣博物志云有仙人鳳子者隱于農夫之中一日大
而有隣人來借屨鳳子曰他人屨則可借我之屨
不借者也其人怒詈之鳳子以草屨擲與化為龍去杜夫
魚 藏器曰杜父魚生溪洞中長二三寸狀如吹沙而短其尾岐
大乃洞口其色黃長有斑脊背上有鬚刺螫人○時珍曰渡
又魚一名黃鯽魚又船疋魚杜父當作渡父溪洞小魚渡父所食
也見人則以喙挿入泥中如舟疋也○多識篇曰杜父魚今案伊加
○和漢三才圖會曰又伏念魚利字於
讀止牟保倍云止牟古云
鰈師 時珍曰魚師陳藏器諸魚
注云鰈師大者有毒殺人

其部此歟 ○多識篇曰魚師或說 ○和漢三才圖會曰鰯音鰯音名波里萬知畧曰波万知其身曰大而細鱗以大口夫背蒼腹白肉中有紫血色一條內有細刺如鮪鰻之紫血肉俱曰血合也味酸不美六月其小者五六寸名津波須西國號和加奈九月一尺許者名眼白十月逾二尺者名鰯江東稱伊奈太仲冬長三四尺最大者五六尺名鰯冬春食之脂多味厚丹後為上此魚自少至老時改名初在江海徐出大洋而復自東北海連行終西海對州焉以為出世昇進之物稱之大魚貴賤相饋為歲末之嘉祝 ○本朝食鑑曰曝乾者呼曰鰯筋或以鮮者作膾食亦稍可然官家不用而為民家之用也又淹者味耳美故丹後刺史爭獻貢之

寒苦鳥

時珍曰寒號蟲一名鵙鵙詩作蓋且 ○說文曰作鵙鵙皆隨義借名耳楊雄方言云自閩而西

謂之鵙鵙自閩而東謂之城且亦曰倒懸周魏宋楚謂之獨春郭璞云鵙鵙夜鳴求旦之鳥夏月毛臧冬月裸體晝夜鳴呼故曰寒號曰鵙鵙古刑有城且春謂晝夜春米也故又有城且獨春之名月令曰仲冬鵙且鳴蓋冬至陽生漸暖故也其屎名五靈脂有謂狀如凝脂而受五行之靈氣也曷且乃候時之鳥也五臺諸山甚多其狀如小雞四足有內翅夏月毛采五色自鳴如曰兀兀不如此至冬毛落如鳥雛忍寒而號曰得過且過其屎恒集一處氣甚臊惡粒大如豆米之有如糊者有粘塊杵也 ○佛經曰印度大雪山有鳥此鳥夜苦寒鳴聲寒苦責身夜明造菓明又今日不知死亦不知明日何故造菓安穩無常身 ○玉葉集詠此意和歌云物乃く高れ去山の鳴るの声小

新生姜

本州別錄曰生薑九月采之 ○

後京極

時珍曰善宜原濕沙地秋社前後新芽頗長如列指狀采食無毒
無筋謂之子善秋分後者次之霜後則老矣秋熟則無毒○本草
食鑑曰生薑訓志也字加釋名織源順曰和名久礼乃波之加美
知々有之米去辛之舊根而二月種之四五月生淡碧黃芽根亦
碧白附于舊根而生俱如初生蘆芽漸長葉似竹葉對生而味辛
香青莖根乃著紅皮其新根橫連如列指狀至秋尚壯云是新生
薑也 同書曰蕪菁訓加布奈上下平素日用之菜而
類效而莖粗葉大而厚潤根長而白或肥大而短以根州江州之
產為勝就中出自天王寺之境者肥豐短小而端屈晒乾以貨四
方凡干蕪冬至以前取根掛擔間
乾之故各乾蕪春月煮食極其美

虎耳艸

時珍曰虎耳
草生陰濕處

新干蕪

不俟諸葛之種此民間所每有四時俱采之狀

人亦栽于石山上高五六寸有細毛一莖一葉如荷蓋狀葉大如
錢形初生似小麥葉及虎之耳秋夏開小花淡紅色○和漢三才
圖會曰一名石荷葉倍云雪下草葉布
地生其花白帶淡紅微似秋海棠
樹葉似檉而葉不韌其香略似山礬花香四月開細白花秋結子
赤色似仙靈子○花彙曰茵芋訓深山檉深山皆陰地多產
其木高少上ヲ好テ偃卧シテ藤蔓ノ如シ其色灰白葉莖
以ニ叢生ス冬ヲ凌テ凋ニス秋蓬葉紫葉ニ類シテ長大ナリ
冬梢間ニ五出碎花ヲ著ク穗ヲナシテ簇生ス粉紅褐色ノ実
ヲ結フ樟柳ニ似テ大ナリ云按和三花彙ノ說同名異種ナリ
和三ノ說ハ京師ニテ冬月花肆ニ多ク仏前ノ花瓶ニ
挿テ紅実ヲ愛スルモノ是也花彙ハ別種ノ說ナリ

太山檉

同書曰深
山檉正字
未詳

